

ウェールズ再発見
(その 5)

トマス・ペナントと『ウェールズ旅行記』

Wales Rediscovered
- Part 5 -

Thomas Pennant and *A Tour in Wales*

吉 賀 憲 夫
Yoshiga, Norio

Abstract Thomas Pennant was a naturalist, antiquarian, zoologist and travel writer in the eighteenth century. As a zoologist, he published *British Zoology* and this book made him a fellow of the Royal Society. His interest in zoology and botany brought him to Scotland and he wrote *A Tour in Scotland and Voyage to The Hebrides* which Dr. Samuel Johnson praised highly in spite of Dr Percy's bitter objection to the book. This book was the beginning of Thomas Pennant's career as a travel writer.

A Tour in Wales was one of the most popular and important guidebooks of his time. In the book, he depicted the natural beauty of Wales, Welsh culture, the ancient ways of Welsh life, and the early stages of the industrial revolution in Wales. One of the most influential things Pennant did in his book was the re-evaluation of Owain Glyn Dwr. Pennant created a new image of Owain as a national hero who fought England for Welsh independence.

1

地誌学者、博物学者、動物学者、植物学者、古物研究者、旅行家という多彩な顔をもつトマス・ペナント(Thomas Pennant:1726-98)は、1726年7月14日、北ウェールズはフリント州のダウニング(Downing)に生まれた。ペナント家は、一二世紀にダウニングに隣接するバクトンの女性相続人と結婚し、この地にやって来たマドッグ・アップ・メイロー(Madog ap Meilor)まで遡る。またマドッグの先祖テューダー・トレヴァー(Twdor Trefor: fl. 940)の妻アンハアラッ

ドは、ウェールズの法律を法典化したハウエル善良王の娘であった。

トマス・ペナントの少年時代の様子はあまりよくわかっていない。天然痘にかかったことや、12歳のとき、鳥類学の本を親戚のバハグライグ(Bachygraig)のジョン・ソールズベリからプレゼントされ、博物学に興味を抱いたことが知られている。このジョン・ソールズベリの娘は、18世紀イングランド文壇の重鎮サミエル・ジョンソン博士の友人として有名なスレール夫人である。彼女はのち再婚しヘスター・リンチ・ピオッツイ(Hester Lynch Piozzi:1741-1821)となる。

ペナントは北ウェールズのレクスラムとロンドンで教育を受けたあと、1744年にオックスフォード大学、クイーンズ・コレッジに入学する。在学中、コーンウォールに旅をし、コーンウォールの古物研究者であり、博物学者であったウィリアム・ボーレイス(William Borlase: 1695-1772)と親交を結んだ。当時の大学では決して珍しいことではなかったが、ペナントは学位を取得しないまま大学を去った。しかし彼は大学生生活で、旅の楽しみと、研究の喜びを知った。その後、彼はアイルランド、マン島、ヨーロッパ、スコットランド、ヘブリディーズ諸島、イングランド各地、そしてウェールズを旅することになる。また、研究も続け、英国学士院の研究誌に寄稿した。その中には1754年4月にダウニングで観測された地震に関する論文がある。1755年にはスウェーデンの植物学者リンネ(Carl Linnaeus: 1707-78)と文通を始め、ウプサラ学士院の会員に選ばれた。

1759年、ペナントは結婚し、ダウニングに落ち着き、最初の著書『英国動物誌』(*British Zoology*)の執筆を始める。この本は、1766年から1777年にかけて4巻本として出版された。この成果により、彼は英国学士院会員に選ばれる。しかしこの本は2つ折り版という、本では一番大きな版で、縦が30センチ以上の大きさであったため、この出版は財政的には大変高がついてしまった。この反省から、これ以降の彼の本は、4つ折り版、または8つ折り版という小型本で出版されることになる。その後、『英国動物誌』の補遺として『英国四足動物史』(*History of British Quadrupeds*)が1793年に出版された。

1763年、父デイヴィッド・ペナントが亡くなり、翌年には妻のエリザベスが亡くなってしまった。その悲しみの打撃から立ち直るため、翌年ヨーロッパ旅行に出かけ、行く先々で著名人を訪ねた。その一方で、ダウニングでの鉛鉱山の開発に成功し、多額の利益を得、屋敷を改築することができた。そこには立派な図書室が作られ、多くの図書が購入された。彼の蔵書は20世紀に行われた3度のオークションで散逸してしまっていたが、オークションのカタログからその全容を知ることができる。冊数にして5000冊以上、分野は主として地誌学、旅行記、博物学が占めていた。

1769年にはペナントはスコットランド旅行をし

ている。この旅の目的はスコットランドの植物や動物の調査であった。しかしこの旅は急に思い立ったものであり、準備も不十分で、ヘブリディーズ諸島は含まれていなかった。この時の旅行が1771年に『スコットランド旅行記』(*A Tour in Scotland*)として出版されたが、その旅行記中の記述も十分なものではなかった。そこで彼は1772年に5ヶ月にわたる2度目のスコットランド旅行を行なった。今回は3名の同行者を加えた。その1人は1777年に『スコットランド植物誌』を出版することになる植物学者でもあるジョン・ライトフット師(Rev. John Lightfoot)であった。2人目はゲール語学者であるハンプシャーの教区牧師であるジョン・ステュアート師であった。そして3人目に、彼よりも23歳年下のモーギーズ・グリフィス(Moses Griffith: 1749-1819)が、召使い兼旅行記録係の画家として同行した。ペナントは動物学の本を出版した経験から、地誌学や動物学の本には正確な挿絵が必要であるということをも十分に認識していたからであった。モーギーズ・グリフィスは、その後のペナントのすべての旅に同行することになる。このときの旅行をもとにして書かれたのが『1772年のスコットランド旅行とヘブリディーズ諸島への航海』(*A Tour in Scotland and Voyage to The Hebrides*)として第1巻が1774年5月に、第2巻が1776年に出版された。

サミエル・ジョンソン博士(Samuel Johnson: 1709-84)はペナントの1774年の『スコットランド旅行記』を読み大いに刺激され、彼とボズウェルが1773年に行なったスコットランド旅行をもとにした『スコットランド西方の島々への旅』(*A Journey to the Western Islands of Scotland*)を1775年に出版した。このようにジョンソンは、ヘブリディーズ諸島への旅の先達としてペナントを尊敬しており、また旅行家として大いに評価している。

ジェイムズ・ボズウェル(James Boswell: 1740-95)の『ジョンソン伝』には、ペナントの『スコットランド旅行記』をめぐるジョンソン博士とパーシー博士(Thomas Percy: 1729-1811)との「論争」が記されている。

旅行記の名を並べ上げて、ジョンソンはスカイ島のダンヴェガンでそうしたように、ペナントを褒め

ちぎった。名家パーシー家の相続人であり、高貴なるノーサンバーランド家に熱烈で恭謙な愛着を抱いていたパーシー博士は、ペナントの旅行記をつまらないものと考えていたので、オルンウィック城とその公爵の庭園を貶した男が褒められるのを、じっと座して聞いてはおれなかった。・・・パーシー、「ペナントは上手に記述してはいません。ロソホ・ローモンドの湖の湖畔に行く運送業者の方が、もっと良く書きますよ。」ジョンソン、「彼は大変うまく書いていると思うが。」パーシー、「私は彼のあと、旅をしました。」ジョンソン、「わたしもまたその後で旅をした。」パーシー、「でも先生、あなたは近眼でしょ。だから私ほどはよく見えないんだ。」私はパーシー博士がこのようなことをあえて言ったことに驚いた。ジョンソン博士はそのときは何も言わなかったが、しかし可燃性の粒子が凝縮し、雲となり、まさに爆発しそうであった。しばらくの間、パーシー博士はペナントについてなにかもっと非難めいたことを言った。・・・ジョンソン、「君(ボスウェル)、ペナントはホイッグだ、あわれな犬だ。(単にそれは政治的意見の相違に過ぎなかったが、彼は自分自身の激しい表現に苦笑しながら言ったのであった。)しかし彼(ペナント)は、今まで私が読んだなかで最高の旅行家だ。彼は他の誰よりも多くのことを観察している。」¹⁾

ボズウェル自身は、ジョンソン博士がペナントを「最高の旅行家」とすることに対しては、褒めすぎであると断言するが、彼自身次のようにペナントの価値を認めている。

スコットランド旅行家としてのペナント氏を公平に非難した上で、私よりももっと確かな権威者の意見に従い、有能な動物学者にふさわしい讃辞を彼に贈る。そして私の理性と感性にしたがい、彼の『ロンドン』の持つ価値を認める。ある事柄等に関しては正確でないと言われているが、その本は今までにいかなる言語で書かれたものよりも、地誌的業績としてたいへん素晴らしいものの一つである。²⁾

この「ペナント論争」が行われたのは1778年4月であるが、その年ペナントの『ウェールズ旅行記』

の第1巻が出版されている。ペナントは前書きを同年2月1日に書いているので、恐らくこの論争の時点では彼のもっとも有名になる著書はまだ出版されておらず、またこの当事者たちもこの本は知らなかったであろう。ペナントの名声は主として英国学士院会員の動物学者としてのものであるが、ジョンソン博士やボズウェルが評価しているように、「地誌学的著述」においても、ペナントはすでに頭角を現しつつあったのである。

2

トマス・ペナントの数多くの旅行記のなかでも白眉と言われる『ウェールズ旅行記』(*A Tour in Wales*)は1773年と1776年に行われた旅に基づいて書かれたものである。2巻からなるこの旅行記は、第1巻は1778年に、第2巻は1781年に出版された。1784年には、誤りを訂正した2巻本が出版されている。1883年には、ウェールズ生まれのケルト学者ジョン・リース(John Rhys:1840-1915)が編集し、注釈をつけた3巻本が出版された。『ウェールズ旅行記』と銘打っているが、この本の扱っている地域は北ウェールズが中心であり、南ウェールズに関する記述はない。

この本は3部から成る。第1部はチェスター、オズウェストリ(Oswestry)、スランゴスレン(Llangollen)、アル・ウィヅグリッグ(Yr Wyddgrug)、カイルウィス(Caerwys)を扱っている。第2部はスノードン(Snowdon)、アングルシー、そしてスウィーン(Llyn)半島をカバーし、この旅行記の中でも、もっとも魅力的なものとなっている。第3部はペナントの本拠地ダウニングから南にシュルーズベリ(Shrewsbury)に至る旅であった。

ペナントはフランス語やラテン語は堪能であったが、ウェールズ語はほとんど何も分からなかった。それは当時のウェールズ上層階級の人々の間では、みな同じであった。そのような訳で、彼のウェールズの旅には、カイルウィスの牧師ジョン・ロイド(John Lloyd of Caerwys: 1733-93)が同伴し、ウェールズ語の通訳をした。また彼はペナントにウェールズの地誌、歴史、慣習に関する多くの情報と助言を与えた。ロイドは1757年にオックスフォード大学ジ

ーザス・コレッジを卒業し、1778年にカイルウィスの教区牧師となった聖職者であった。

ペナントは馬に乗り旅をした。馬で行くことのできない場所は、馬を下り、そこから徒歩で目的地に行った。そのようなわけで、その旅行記では、彼の目で見た地形や風景が克明に記述されている。当時流行の「ピクチャレスク（絵画）」的景観の地も紹介されている。スランゴスレンでは、そこにある有名な橋に言及している。

1357年に死亡した最初のジョン・トレヴァー(John Trever[1]:d.1357)セント・アサフ司教により造られたその橋は「ウェールズの3大美」の一つに数えられているが、素晴らしいのはその橋の構造というよりもむしろその橋のある場所である。その橋は五つのアーチでできており、そのアーチは最大のもので、直径が28フィート(約8.5m)を越えることはない。通常、川はそれらのアーチの、たった1つの下だけを流れている。そこは大きな深い暗黒の裂け目となっており、全ての河床を構成する滑らかで固い岩床の高い岩棚から、水が奔流となってその中に流れ込んでいる。それらのアーチを通して見る光景は、上流に向かってであろうと、下流に向かってであろうと、素晴らしくピクチャレスク的である。(『ウェールズ旅行記』、第1巻、296頁)

ペナントはまた、コーウェン(Corwen)からバラ(Bala)に向かう途中にあるスランドリロ(Llandrillo)の村から、さらに約1.6km行った所にある橋からの素晴らしい眺めを次のように記し、ピクチャレスク絵画の巨匠サルヴァートル・ローザ(Salvator Roza: 1615-73)に想いを馳せている。

スランドリロから約1マイル行った所で、私は再びディー川を渡った。その深い黒い流れの上に架かった橋は、2つのアーチからなるポイント・ギラン橋であった。ここより前方は、谷は新しい美を纏う。特に右側はそうである。その谷はここで非常に狭まっている。途方もなく高い崖の下を道路が通っており、その道路は古くて神々しい檜の木々に覆われている。それらの木々は荒々しい岩場のただ中に断固としてその持ち場を維持している。岩はしばしばそ

の灰色の割れた断面を、檜の木の濃い緑色の葉の合間に見せている。大変不思議なことではあるが、木々はその岩場で養分を見つけるのだ。成長する檜の木は、無理矢理に根を下方に張っていくので、しばしばこれらの巨大な岩盤を砕く。そして驚くべき大きさの岩の破片が、谷底に散乱しているのである。この風景を描き尽くすにはサルヴァートル・ローザの絵筆を必要とする。そしてここで、英国の若い芸術家たちは、この荒々しい自然を描く偉大な画家の画法を学ぶにふさわしい場所を発見するであろう。(『ウェールズ旅行記』、第2巻、64頁)

ペナントはまた「英国風景画の父」と呼ばれるウェールズ人画家リチャード・ウィルソン(Richard Wilson: 1714-82)の有名な絵「ナントス湖から見たスノードン」(Snowdon from Llyn Nantlle)の描かれた場所を紹介してくれる。そこはベズゲラートからミニッツ・マウルの麓を通りクリンノグ(Clynnog)へ向かう途中にある、美しい2つの湖の畔である。

私の目的は2つの美しいスリーネ・ナントス湖(Llynau Nantlle)の姿を見ることであった。それらは互いにとても接近しており、2つの美しい広々とした水面を形成している。そこから眺めると、ドロス・ア・コイド(森の峠)を前景とし、その背後に高貴なアル・ウィズバの姿が見える。ウィルソン氏がその壮大な姿を忠実に描いたのはこの地点からであった。ほとんどの人はこれに気付いていない。というのはこの地を訪れる人はほとんどいながらである。(『ウェールズ旅行記』、第2巻、181頁)

アル・ウィズヴァ(Ar Wyddfa)はスノードン山の一番高い峰の名である。ウィルソンは、ほとんど誰も訪れることのないスノードン山を望むこの景観の地を訪れ、名作を描いたのだ。またその地を訪れ、それを語るペナントも、どこか誇らしげにみえる。しかしペナントがここからアル・ウィズバを眺めて6年後、またこの彼の文章が出版された翌年の1782年に、ペナントの親戚でもあるウィルソンは貧困のうちにスランベリス(Llanberis)で死んでいる。

スノードニアではペナント一行は、カペル・キリグ(Capel Curig)からグリデル・バッハ山(Glyder

Fach)とモエル・ジャボッド山(Moel Siabod)が作る谷間を進んだ。ペナントは山頂が奇岩で覆われているグリデル・バツハ山に登るために馬を下りた。召使いには馬を連れスランベリスに向かうように指示し、彼は徒歩で山頂を目指した。大変厳しい登山であった。

我々の苦痛は頂上に着いたとき、完全に報われた。頂上は柱状の巨石群で覆われていた。それらの大きさは 10 フィート(3m)から 30 フィート (9.1m)であり、四方八方に横たわっていた。それらのほとんどは柱状をしており、しばしば積み重なった状態にある。別の場所ではそれらは、半ば直立したり、傾斜したり、お互いに寄りかかった状態で立っている。そしてそれらの岩の基底部には、何の秩序もなく岩が横たわっている。それらの立った岩の上には、しばしば他の石がとても不思議な姿で水平に載っている。その 1 つは、25 フィート(7.6m)の長さで、幅が 6 フィート(1.8m)であった。私はその上に乗り、足でそれを強く踏みしめてみた。すると端から端まで強い振動が感じられた。もう 1 つのものは、長さが 11 フィート(3.3m)で、もっとも薄い部分で外周が六フィートであったが、それは岩の一点でうまく平衡状態を保っており、外見上は、子供がちょっと触れるだけでもフィッツくり返すことができるように見える。三番目の巨石群は揺れる岩であった。(『ウェールズ旅行記』、第 2 巻、151～2 頁)

ペナントはこの山頂を覆う巨石群に大いに満足したようである。また別の場所では、「悪魔の台所」(デヴィルズキッチン)と呼ばれる巨大な断崖の中央にある長さ 150 ヤード(137m)、幅 66 ヤード(55m)、深さ 100 ヤード(91m)の恐ろしい裂け目を、勇気を振り絞り、息を飲み、覗き込んでいる。

またスノードニアでは、植物学者、動物学者としてのペナントの顔が垣間見られる記述もある。彼はスノードンでは美しい山岳風景や湖を紹介しながらも、さりげなく貴重な植物や動物に言及することも忘れてはいなかった。彼はグリデル・ヴァッハ山から下山するとき、「凍え平」とでも言う意味の平らな鞍部ア・ワイン・オエルを通り、次のように旅行者に忠告する。

グリデル・ヴァウル山(Glyder Fawr)とグリデル・ヴァッハ山はア・ワイン・オエルで繋がっている。ゆえに旅行家はこれらの素晴らしい山への道を選ぶが、しかし楽で、もっとも好ましいのは、私がスランベリスの谷へと下りていった道を選ぶことである。道の途中で、リウ・ア・グリデル(Rhiw y Glyder)だと思いが、1 つの丘のごつごつした崖のすぐ側を通る。その丘の様々な植物がスウィードとレイにより記録されている。そこからはオレイ・ヴァウルを通過して下りて行った。

すぐその後、ギラルドゥスの話で有名なスィーン・ア・クーン(Llyn y Cwn)という小さな湖に着く。ギラルドゥスは、当時その湖に住む 3 種類の魚(マス、パーチ、ウナギ)はみな片目であり、左目がないと記している。現在は、魚はまったくその湖にはいないので、ギラルドゥスの記述を論駁することもできない。(『ウェールズ旅行記』、第 2 巻 156 頁)

ペナントはスノードン山が数多くの珍しい貴重な植物の宝庫であることに言及するとともに、エドワード・スウィード(Edward Lhuyd: 1660-1709)とジョン・レイ(John Ray: 1627-1705)の名を挙げ、また右目しかない魚に関してはギラルドゥス・カンプレンスの名を挙げ、先人達に敬意を表している。

エドワード・スウィードはウェールズの生んだ偉大な植物学者、地理学者、古物研究家、旅行家、言語学者、そして博物学者であった。6 万点を超えるコレクションを国に遺贈し、大英博物館設立の基礎を築いたイングランド人の医学者であり博物学者であった英国学士院院長サー・ハンス・スローン(Sir Hans Sloan: 1660-1753)は、エドワード・スウィードをヨーロッパ最高の植物学者と評したほどであった。スウィードは一六八二年、オックスフォード大学ジーザス・コレッジに入学すると、オックスフォード大学付属美術館として 1683 年に創設されたアシュモール美術館の初代館長プロット博士の助手に任命された優秀な学生であった。

彼は 1680 年頃からスノードンを訪れ初め、1688 年の夏にはスノードン一帯で植物採取を行い、40 種類以上の新しい植物を発見した。それらはケンブリッジ大学の博物学者で、イングランドの動植物の組織的な記述を最初に成し遂げたジョン・レイの

1690年の著書『シノプシス』(*Synopsis Methodica Stirpium Britannicarum*)に掲載された。スウィードは、プロット博士を通じ彼を知るようになったのである。

スウィードが発見した植物の中でもっとも重要なものは、クーム・イドワル(Cwm Idwal)の高い絶壁の上で彼によって見つけられた背が10cmほどの小さな白いユリであった。スノードンリリーと呼ばれるこの高山植物は紆余曲折の後、全くの新種であることが判明し、彼の名に因み学名をロイディア・セロティナ(*Lloydia Serotina*、和名、千島甘菜)と命名された。³⁾ その花は、目立たない細い茎を持つ単生花で、褐色の葉脈と黄色の花芯と白色の花弁をもち、数本の糸のような葉をもっている。スウィードがそれを発見したときには、その植物は花を付けておらず、彼は葉だけを見て、それが新種であることを見抜いたという。そのような事情で、ロイディア・セロティナがレイの『シノプシス』に載るのは1696年の第2版になってからであった。

1854年にウェールズを旅し、ウェールズ旅行記『ワイルド・ウェールズ』を出版したジョージ・ボローはその折り、娘ヘンリエッタとガイドを伴い、スノードン山に登頂した。ヘンリエッタは頂上近くである植物を見つけた。

頂上から少し下りていくと、右側にカベル・キリッグへと続く峠に至るジグザグに折れ曲がった急勾配の山道があった。もしスノードン山にこの山道を通して登るとすれば、それは大変な困難をとまなうであろう。我々が登ってきたのは比較的楽な道であった。ヘンリエッタは私に1つの植物を指さした。それはこの山道を少し下りたところの横の、ごつごつとした岩に生えていた。その植物をヘンリエッタのために探つてやろうと、私がまさにその山道を下り始めようとしたとき、我々のガイドが、まるで若い山羊のような敏捷性で矢のように駆け下り、1分も経たないうちに手にその植物をもち、戻って来て、娘にそれをうやうやしく差し出したのである。娘はそれをじっくりと見て、それが長年標本に加えたいと熱望していた種に属するものであると言った。(『ワイルド・ウェールズ』、165～6頁)

果たしてこのようなエピソードが実際にあったの

かどうかはわからない。もし事実だとしたら、ヘンリエッタが見つけたこの植物は何であったのであろうか。恐らくそれはロイディア・セロティナではなかったであろう。その貴重な植物はたやすく人目に触れるような所には決してなかったからである。デヴィルズ・キッチンがその自生地として有名であるが、そこは決して人を寄せ付けることのない危険な場所である。

左目のない魚の住む湖に関しては、ペナントがギラルドゥス・カンブレシスの名を挙げているように、ギラルドゥスの『ウェールズ紀行』第2巻、第3章「スノードニアの山々」にその記述がある。その章において、ギラルドゥスはスノードニアの山々の頂上には大変特異な湖が2つあり、1つは移動する浮島を持つ湖であり、もう1つは片目の魚のいる湖であるという。片目の魚に関しては、後述することとし、まずは浮島に関するギラルドゥスの記述から見てみよう。

1つは浮島である。それは湖面を移動し、しばしば風の力によって向こう岸に吹き寄せられてしまう。羊飼いたちはその浮島で草を食べている羊の群れが、湖の遠くに流されて行くのを見て驚くのである。おそらくその浮島は、そこに生えている柳やその他の灌木の根によって自然に結びつけられていた岸の一部が、長い年月をかけてちぎれて離れ、岸から流れ出た土壌が堆積し、大きくなったのであろう。(『ウェールズ紀行』、195頁)

ペナントはこのギラルドゥスの記述にある湖を訪れている。それはスウィン・ア・ダワルヘン(Llyn Dywarchen)、つまり芝草の湖と呼ばれていた。

その湖(スウィン・クウェスイン:Llyn Cwellyn)からほど遠くない所で、私はスウィン・ア・ダワルヘン湖(芝草の湖)を訪れるために右に進路を変えた。その湖はギラルドゥスの誇張された筆により「彷徨う島」(*insula erratica*)と命名され、それ以来有名になった。その小さな湖は泥炭地の中程にあり、今日でもそのロマンティックな歴史家によって記録された現象を実際に見せてくれる。その湖には不規則な形をした約9ヤード(8.1m)の長さの浮島があっ

た。それは水によって下の部分を浸食され、岸から離れたが、しっかりと絡み合う根で地面のような形を保っている泥炭の土の一固まりのように見えた。その浮島はたびたび風によって動くが、いつもは元の岸にくっついている。そしてギラルドゥスが言うように、その島に乗っている家畜は、強風により島が岸からちょっと離れると、それは驚くのである。

(『ウェールズ旅行記』、第2巻、180頁)

浮島の成り立ちに関するギラルドゥスとペナントの見解は同様のものである。またギラルドゥスが述べている浮島のある湖がスウィン・ア・ダウルヘンであるということも、実際その湖に浮島というほどのものではないにしろ、確かにそれに類したものがあつたということでも間違いはなさそうである。ギラルドゥス自身スノードン山を訪れたことはなく、この話は伝聞で知っていたのであろうが、たとえ少々誇張があつたとしても、決して彼の作り話ではないのである。

しかしジョウゼフ・クラドック (Joseph Cradock: 1742 - 1826) が 1770 年に出版した『スノードンからの手紙』 (*Letters from Snowdon*) では、彼はそのような湖の存在を否定したばかりでなく、それをギラルドゥスの捏造として一笑に付している。

その道路の近くに、注目に値する2つの湖がある。ギラルドゥスは、その湖に浮島があつたと虚偽を述べている。またその存在を肯定する者がいるが、彼らはギラルドゥスと同様、真理に対しほとんど注意を払わない者たちである。⁴⁾

クラドックが何を根拠に、ギラルドゥスの話が捏造であると断定したかはわからない。しかし聖職者で、ウェールズ旅行家であり、文人でもあるジョン・パーカー (John Parker: 1798-1860) は、彼がオックスフォード大学の学生であつた 1819 年の9月から10月にかけて12日間北ウェールズを旅した折り、この湖を訪れ、その浮島をスケッチしている。また彼がカナークのゴート・インに宿泊したとき、客室に備え付けのクラドックの『スノードンからの手紙』を読み、その誤りの多さに不快感を示したが、特にこの湖に関する記述を槍玉に挙げ、大いに非難

している。⁵⁾

その浮島は確かに存在しているのである。ペナントもそれを著書に記し、パーカー自身その絵を描いている。また画家で『カンブリア素描』 (*Cambria Depicta*) を書いたエドワード・ピューは、その浮島は長さ8ヤード (7.3m)、幅は4.5ヤード (3.6~4.5m) であり、現地の人々はその浮島が湖のどの岸に着いているかで、その日の天候を予想すると記している。⁶⁾

さて、片目のない魚のいる湖に戻ろう。ギラルドゥスは言う。

2番目の湖は注目に値する珍しい物を持っている。その湖は3種類の魚で溢れている。すなわち、ウナギ、マス、それにパーチである。そしてそれらの全てが片目しかないのだ。それも右目だけで、左目がない。もし生真面目な読者がいて、そのような珍しい現象の原因は何かと訪ねられても、私には判らないと答えるほかない。(『ウェールズ紀行』、195頁)

ギラルドゥスは先の浮島に関しては浮島の成り立ちを推理することに成功しているが、片目のない魚に関してはまるでわからないと、匙を投じている。浮島の湖の名前も、左目のない魚のいるという湖の名もギラルドゥスは記してはいない。しかしそれはおそらく現地の人々には有名であつたのであろう。浮島の件といい、ギラルドゥスの記述は信憑性が高い。ペナントはウェールズにかけては先達であるギラルドゥスの叙述には敬意をもって耳を傾けるのであるが、しかしながらこの魚の件に関しては、この湖には魚自体がないので、ペナントは肯定も否定もできず、少々困っているようである。

動物学者としてのペナントは、アングルシー島のペンモン沖にあるアニス・サイリオル島 (Ynys Seiriol)、英語名パフィンアイランドのパフィン (puffin auks) の生態を生き生きと克明に描写している。

夏のある時期には島全体が渡り鳥であふれる。島の斜面はパフィン・オークス、『英国動物誌』索引番号 232、でにぎやかになり、パフィン甲高い

声で絶え間なく鳴きさえずり、飛び降りてきては巣穴に消えていく。また出てきて、まっすぐ立ち、とてもおかしな身振りで人間を見つめ、それから飛び立ち、旋回し、海に餌を求める。

パフィン は 4 月 の 5 日 または 10 日 頃 に 最 初 に 姿 を 現 す。ほとん ど 1 羽 に 1 カ 所 ね ぐ ら が あ る の が、彼らは 2、3 カ所探したあと、その場所に落ち着くのである。彼らが最初にするのは、巣穴作りである。その仕事は雄に任される。雄は脇目もふらずにその仕事に熱中するので、その作業中の雄を手で捕まえることすらできる。パフィンの中には、巣穴作りの労を惜しみ、パフィンがやって来ている時期には島の反対側に避難しているウサギたちの巣を奪い、自分の巣にしてしまうものもある。

パフィン は 白 い 卵 を 1 つ 産 む。雌と同様、雄も卵を抱く。そして交代に餌を食べに行くときにだけ息抜きをする。雛は 7 月の始めに孵化する。親鳥は雛に強い愛情を持つが、・・・この愛情も再び渡りの季節が来ると終わる。それは大体 8 月の 11 日ごろである。それから彼らは、単なる 1 羽の鳥となって、後に遅れて孵化した羽も生え揃わない雛鳥をハヤブサの餌食に残し、飛び立って行く。ハヤブサは雛が空腹に強いられ巣穴の口に姿を現すのをじっと待つのである。(『ウェールズ旅行記』、第 2 巻、250～1 頁)

ペナントはかなりの紙面を割き、パフィンの生態を克明に描いている。その上、自著『英国動物誌』の書名もさりげなく挙げている。動物学者としてのペナントの面目躍如たる場面である。このような旅行者による現地の動物の生態に関する記述は旅行記では決して珍しくない。ギラルドゥスはダムを造るビーバーの生態を事細かに、また取り憑かれたように『アイルランド地誌』、『ウェールズ紀行』、『ウェールズ素描』に、繰り返し記述している。

『ウェールズ紀行』には失われつつある山岳地帯でのウェールズの生活習慣の貴重な記述もある。夏には山岳地帯では畜牛や羊が高地で放牧されるので、酪農を営む人々はその期間、「酪農のための夏の家」とでも言うべき高地に建てた「ハポタイ」(hafodtai)という家に住んだ。

これらの家(ハポタイ)は天井が低く、細長い 1 つの部屋から成っている。一方の端には、火をおこしたときに出る煙を出すための穴が開いている。家具は質素そのもので、石が腰掛けの代わりにし、ベッドは干し草で、壁にそって配置してある。彼らは自分の衣服を自分で作り、地衣類や、岩から採取したこの地方独特の染料で布を染める。夏の間は男たちは収穫の仕事をするか、家畜の面倒をみて過ごす。女たちは搾乳をしたり、バターやチーズ作りをする。自分たちで消費するためのものとしては、羊や山羊から搾乳し、それでチーズを作る。これらの山で暮らす人々の食べ物はたいへん質素で、それらはバター、チーズ、カラス麦で作ったパンである。彼らは乳清を飲む。しかし、気付け薬として、また病気のときのために、大変アルコール度の高いビールを数本保存している。彼らは理解力が高く、用心深く、慎重であり、生活様式から背が高く、痩せており、がっしりとした体格をしている。冬にかけて、彼らは「古い住居」を意味するヘン・ドレフ(hen dref)へと下りていく。彼らは冬の間は、暇な毎日を送る。(『ウェールズ旅行記』、第 2 巻、161～2 頁)

山岳地帯に住む人々の生活が良くわかる記述である。ギラルドゥスは『ウェールズ素描』第 1 巻、17 章で、ウェールズ人の住居に言及し、「彼ら(ウェールズ人)は町や村や城に住まず、森の奥深く、孤立した生活を送っている。立派な宮殿や、石やセメントで造る大きなそびえ立つような構造物を建造する習慣は彼らにはない。その代わりに、森の端に、手間も費用も掛からない粗末な網枝の小屋を作り、それで満足している。」⁷⁾と書いているが、これはハポタイを実際の住居と取り違えた結果であろう。

ペナントは北ウェールズの著名人であったので、その地方の有力なジェントリたちの所有する貴重な資料を閲覧する機会に恵まれた。それもこの本の価値を高めているところである。『グウィディル家の歴史と回想録』の著者として有名なグウィディルのサー・ジョン・ウィン(Sir John Wynn of Gwydir: ? - 1627)は、北ウェールズの西海岸に面するカナーヴオンシャーとメリオネスを分ける入海トライス・マウル(Traeth Mawr)を干拓する計画を立て、1625 年に、この計画を遂行するための援助を求める書簡を、

ロンドンに住む著名なウェールズ人実業家サー・ヒュー・ミドルトン(Sir Hugh Middleton:1560-1631)に送ったが、その手紙と、サー・ヒュー・ミドルトンの返書が『ウェールズ旅行記』に引用されている。サー・ヒュー・ミドルトンは、ロンドンに新鮮な飲料水を供給するために、ハートフォードシャーからロンドンまで 62.4km に渡る用水路「ニュー・リバー」を 1613 年に完成させた人物であり、その他にも干拓、鉱山開発を手がけ、成功を収めていた。サー・ジョン・ウィンの手紙に対する彼の返事は次のようなものであった。

貴殿のお住まいの近くの土地の干拓に関し、考慮すべき点が多々あります。干拓を行うとなると、木材や大きな石が数多く必要であり、巨額の資金が必要となります。何百ポンドではなく、何千ポンドという額です。そしてまた第 1 に国王陛下の許可を必要とします。私自身に関しては、年老いており、鉱山や、ロンドンの例の川や、その他の仕事で一杯であり、1週間に 200 ポンド以上のやりくりをしています。これらの事情から、もうこれ以上他の仕事に手を出すことは、残念ながら不可能です。干拓にせよ、鉱山にせよ、大金を必要とします。(『ウェールズ旅行記』、第 2 巻、186~7 頁)

サー・ヒュー・ミドルトンの忠告により、膨大な資金のかかるこの干拓計画は幻に終わった。しかしこの計画は 19 世紀になり、このベナントの本を読んだ国会議員ウィリアム・A・マドックス(William A. Madocks: 1773-1828)により実行に移されることになる。またこの工事にたまたま出くわした詩人シェリー(P. B. Shelley: 1792-1822)が、この干拓計画の趣旨に感動して資金募集の演説をすることになる。ところがそれが原因かどうかは不明だが、シェリーの逗留していたマドックスの屋敷に深夜賊が忍び込み、両者の間に銃撃戦が起きるといふ「おまけ」がついた。⁹⁾

『ウェールズ旅行記』は、ウェールズの歴史、文化、慣習は言うに及ばず、各地の美しい自然、息を飲む山岳風景、貴重な動植物等を読者の眼前に提供してくれるが、ウェールズに勃興した産業と、それがもたらした環境破壊の姿も伝えている。それは

アングルシーの北端に近いパリスマウンテン(Parys mountain)の銅産業に関するものである。

ここから私はトリスグルイン山を訪れた。その山の一部はパリス・マウンテンと呼ばれているが、たぶんこれはヘンリー 4 世時代の北ウェールズ出納官であったロバート・パリスから来ているのであろう。そのパリス・マウンテンは今まで発見されたなかで、最大の銅鉱山である。その丘の外見は荒々しく、巨大な荒い白い石英の岩石が盛り上がったような姿をしている。銅原石は窪地の中にあり、その窪地の脇には小さな湖がある。その水はアヴェルヌス湖の水と同じほどひどく、その湖に舞い降りる鳥はいない。この地域全体は鉱山開発により、たいへん荒れ果てた姿となっている。銅を精錬するときに出る息も詰まるような悪臭が、この地域一帯に立ちこめている。それはまた周囲数マイルに有害な影響を及ぼしている。隣接する地域では、植生はほとんど絶滅している。岩につく苔や地衣類ですら絶滅している。多く蔓延(はびこ)っている紫色をしたコメギヤ類の草を除けば、その悪臭に抵抗できるものはないように思える。(『ウェールズ旅行記』、第 2 巻、265 頁)

アヴェルヌス(Avernus)湖とはイタリアのナポリ付近の湖で、その水から発する悪臭により、湖上を飛ぶ鳥さえ死んだといわれる悪名高い湖のことである。銅鉱石採掘のため、水が汚染され、さらに銅の精錬により排出される有毒ガスのため、植生が絶滅するという環境破壊の姿を、ベナントは産業革命の始まった初期に、早くも書き留めているのである。

このベナントの『ウェールズ旅行記』はウェールズの歴史、風土、産業を知る上での貴重な学術的、文化史的資料を満載している。しかし一方で、彼が書き残さなければ忘れられてしまったかもしれないようなエピソードも記載されている。それらはこの旅行記につきまとう、ある種の堅苦しい真面目さを和らげてくれる。そのような例の一つとして、交通の難所として古来より有名なペンマイン・マウル(Penmaen Mawr)に関する記述がある。ペンマイン・マウルは海に突き出た断崖絶壁であり、その上を通る道から多くの者が落下して命を落とした。しかし

奇跡的に命の助かった者もいた。その中には、消費税徴税吏とアングルシー島のスランアイリアンの教区牧師となったジョーンズ師が含まれていた。しかしペナントはその次に、さらに興味深い話を始める。

約1世紀前、この教区(スランヴァイルヴェハン:Llanvair Vechan)のジョン・ハンフリーズはコンウィ川の対岸にあるクレイディンのアン・トーマスに求婚した。彼らはコンウィの町に市場が立つ日に会う約束をした。男は行く途中でペンマイン・マウルから落ちてしまった。女の方は、乗った渡し船が転覆し、80人以上の乗船客のなかで彼女だけが助かった。二人は結婚し、ランヴァイル教区で共に長生きした。女は1144年4月11日、116歳で埋葬された。男は妻より五年多く生きのび、1749年、12月10日、その教区教会墓地に埋葬された。彼らの墓は今日に至るまで優しく見守られている。(『ウェールズ旅行記』、第2巻、305~6頁)

このような、ちょっと信じがたいような話に出くわすのも、この旅行記の楽しみの一つなのである。ちなみに、1776年、18世紀の分断の大御所ジョンソン博士もスレール夫妻とともに、このペンマイン・マウルの道を通った。しかしそのときにはもう既に、この危険な断崖の上の道に落下防止用のための石の塀が作られていた。⁹⁾

このように、ペナントは旅行記の形でウェールズの地誌、歴史、文化、習慣、そして産業のありさまを克明に記した。

3

ペナントが『ウェールズ旅行記』で行なった画期的なことが一つあった。それはペナントがこの旅行記に、1400年から1416年まで、ウェールズの諸侯や一般のウェールズ人の広範な支持を受け、イングランドに対し「叛乱」を行なったオワイン・グリーン・ドゥール(Owain Glyn Dwr:1354-1415)の詳しい伝記を載せ、そこでオワイン・グリーン・ドゥールを擁護し、再評価したことであった。

15世紀前半においては、ウェールズではグリーン・ドゥールの叛乱の傷跡も生々しく、この叛乱に関し

てまだ一定の評価が下される状態ではなかった。しかし15世紀後半から16世紀の初めにかけて、イングランドでグリーン・ドゥールの叛乱の重要局面に関する記述が現れるようになった。グリーン・ドゥール軍が行った奇襲や焼き討ちに関する事、レジナルド・グレイやエドモンド・モーティマー(Edmond Mortimer:d.1409)を捕虜としたこと、フランスとの同盟、そして叛乱の当事者による領土分割計画などがそれであった。ウェールズでは、グウィディルのウイン家の当主サー・ジョン・ウイン(Sir John Wynn:1553-1627)が1580年頃から書き綴ったと言われる『グウィディル家の歴史と回想録』に、次のようにグリーン・ドゥールの戦略と、その叛乱の傷跡が記されている。

1400年に始まったグリーン・ドゥールの戦争は15年間続いた。その戦争は大変な荒廃をもたらし、ブリン・ア・ボテン(Bryn-y-boten)と呼ばれるスランルスト(Llanrwst)の市場には牧草が茂り、スランルストの教会墓地では鹿が草を食べていたと伝えられている。またイングランド軍がこの地域で体力をつけ、体を休めることのできる場所はすべて破壊するのがグリーン・ドゥールの方針であった。¹⁰⁾

この部分はグリーン・ドゥールの叛乱がもたらした荒廃を良く物語っている箇所である。18世紀初頭でも、まだウェールズの知識人は、オワイン・グリーン・ドゥールは反逆者であり、彼はウェールズ人に多大の苦痛をもたらしたと考えていた。¹¹⁾

しか文学という限定されたジャンルではあるが、シェイクスピアはいち早く『ヘンリー4世、第1部』で、グリーン・ドゥールを大言壮語する尊大な人物としながらも、恐怖の対象としてではなく、誠実で腹の据わった人物として描いている。シェイクスピアの洞察力を垣間見ることのできる事例である。

しかし1770年代になると、反逆者から民族的英雄へとグリーン・ドゥール像は変わっていく。エヴァン・エヴァンズやトマス・ペナントがその役割を担ったのである。特にペナントはグリーン・ドゥールをウェールズ人の解放者として位置づけ、再評価した。ペナントは『ウェールズ旅行記』においてグリーン・ドゥールの伝記に多くのページを割き、しかも大変

好意的に評価した。そこにおいて、彼は特にグリーン・ドゥールとリチャード2世との関係を重視していた。

彼（グリーン・ドゥール）は教養教育を受けたのであろう。彼の望みは、イングランド人に対して自国を卑下する気持ちを克服し、イングランド人の中で立身出世をすることであった。彼は法曹学院に入り、法廷弁護士になった。彼がその弁護士の仕事を辞めたのは、おそらく彼がリチャード2世の警護員に任命されたためであろう。彼はリチャード2世に最後まで従い、共にフリント城に送られた。そしてリチャード2世の王朝が瓦解すると、新王の悪事に対する深い憎悪を抱いて、ウェールズの領地へと戻って行った。（『ウェールズ旅行記』第1巻、327～8頁）

次にペナントはグリーン・ドゥールの居城の様子、吟唱詩人イオロ・ゴッホ(Iodo Goch:c.1320-c.1398)の詩を要約して読者に伝えてくれる。グリーン・ドゥールはウェールズ人にとって吟唱詩人の影響がいかに強いものかを十分に知っていたので、イオロを彼のサハース(Sycharth)の館に招いたのであった。

当時の有名な詩人であったイオロ・ゴッホはしばらくの間ここに住んだ。オワインは古代ケルト人にたいしてこの階層の者が強大な影響力を与えることを知っていたので、彼の館を吟唱詩人の聖地にしたと思っていた。その彼のたったの願いということで、イオロはやって来たのだ。オワインは吟唱詩人達を来たるべき作戦の駒として使い、彼の意図する叛乱に対し人々に心の準備をさせようとしたのであった。私はその族長の館の、往年の壮麗さを伝えるイオロの描写を拝借しよう。彼は荘厳さという点で、それをウェストミンスター寺院に喩える。彼はまた城には門楼があり、堀で囲まれていたことを教えてくれる。

館の中には9つの大きな広間があり、それらにはすべて衣装部屋が付いていた。私は、それらの衣装部屋の中には当時の習慣にしたがい、召使いの服が一杯であったろうと想像する。

その館の近くの緑で覆われた土手の上には、支柱で支えられ、タイルで屋根が葺かれた木造の家が建

っていた。その家には4つの大部屋があり、その大部屋はさらに2つの小部屋に分けられ、来客を泊めるように設計されていた。

ここにはまた十字架の形をした教会が1つあり、幾つかの礼拝堂がついていた。

その館は、快適な生活のためのあらゆる設備と、客を厚くもてなすあらゆるものに囲まれていた。大庭園、養兎場、鳩小屋、粉ひき場、果樹園に葡萄園、カワマスとグウィニアッドのたくさんいる池があった。後者の魚はバラ(Bala)湖から持って来られた。

（『ウェールズ旅行記』、第1巻、328～9頁）

リチャード2世を失い、ウェールズの領地に帰ったグリーン・ドゥールには、隣接するリスインの領主レジナルド・グレイ(Reginald Grey:1362-1440)との土地紛争が待っていた。その土地問題は、リチャード2世の時代に既に裁判で決着していたのだが、リチャード2世亡き後、ヘンリー四世を後ろ盾とするグレイにより再燃させられたのである。叛乱の直接の原因は、このオワイン・グリーン・ドゥールとの国境紛争であったとも、グリーン・ドゥールに対して出されたスコットランド遠征命令を、グレイが故意に遅らせて伝達したことに対するオワインの遺恨であったともいうが、この叛乱が多くウェールズ人の支援を得て、全ウェールズの蜂起に繋がった事実は、この叛乱が単なる一個人の私怨によるものではないことを物語っている。

さらに、この叛乱の背景は遙かに根深いものであった。その1つに、半世紀前ヨーロッパで頻発した農民暴動に見られる農民の貧困が挙げられる。また千年至福王国の思想も背後にあり、貧しい農民たちは、西暦1400年を境に世界が変わると考えていた。ウェールズの困窮した農民は変革を求めているのであった。このような困窮した現状のなかで、叛乱の導火線となったのがリチャード2世の廃位であり、それに火をつけたのがグリーン・ドゥールであったといえよう。

この叛乱は、1400年9月16日、オワイン・グリーン・ドゥールがグリンドブルデュウィ(Glyndyfrdwy)の領地で、自らをプリンス・オブ・ウェールズと名乗り、9月18日にグレイが不在のリスインを襲い、デンビー、リズラン、フリントやその他の重要な町

を次々に攻撃したことから始まった。1402年には宿敵グレイや大貴族モーティマー(Edmund Mortimer:d.1409)を捕虜とした。また1404年には、マハンセス(Machynlleth)の町にウェールズ諸侯を招集し議会を開き、彼はスコットランド、フランス、スペインの代表者の前で正式にウェールズ大公(Prince of Wales)として認められたのであった。

ペナントはグリーン・ドゥールに対する2度の暗殺未遂を紹介している。また彼は、事実上、叛乱の最終局面となったハーレフ城の陥落と、それに伴うグリーン・ドゥール一族の悲劇にも触れているが、これらはみな淡々と記述されている。

1413年、ヘンリー4世が死去した。後継者のヘンリー5世はフランスとの戦いを始めようとしていた。したがって、彼にとって国内問題は早急に解決しなければならなかったが、グリーン・ドゥールは守りが厳しく、近づくこともできなかった。1415年、彼はグリーン・ドゥールと和平交渉に入るべく、サー・ギルバート・タルボット(Sir Gilbert Talbot)を全権代理人に命じた。またグリーン・ドゥールとその部下が無条件赦免を求めたときには、それに応ずることになっていた。しかしこの条約交渉はグリーン・ドゥールの死で中断されてしまった。1415年9月20日、グリーン・ドゥールはウェールズの国境に近いヘレフォードのモニントン(Monnington)にある娘の家で息を引き取ったといわれている。

ペナントはグリーン・ドゥールの伝記に『ウェールズ旅行記』第1巻の364頁から394頁までの68頁を費やした。しかし、彼はグリーン・ドゥールの晩年に関する後世の書物等の記述に大いに異議を唱えるのである。

印刷された歴史書も手稿の記述も、彼の晩年が大変惨めなものであったと述べている。すなわち彼は羊飼いの衣服を身に纏い、うち沈み、希望を失い、敵の怒りから逃れるため洞穴や人気のない場所に身を隠し、次から次へと場所を変え彷徨ったという。しかしこれには蓋然性がない。もし彼の状況がかくもひどいものであったのなら、イングランド王はイングランド王国にとって苦難の元となったグリーン・ドゥールに対し、和平条件を提示するという身を貶めるようなことは決してしなかったであろう。隠遁

や、彼が経験した苦悩は、たぶん1405年のプス・メリン(Pwll Melyn)の戦いの後のことであった。それらから彼はすぐに立ち直った。申し出られた和解を受諾する栄光を、死がオワインから奪ってしまった。1416年2月24日にその条約は、同じ代理人により、グリーン・ドゥールの息子マレディズ・アップ・オワインとの間に新たに締結された。15年間に渡る決着のつかない苦闘の末、イングランドとの間に平和が取り戻されたのであった。我らの族長は屈することなく死んだ。また不幸にも彼は、独立の偉大な後ろ盾を失った後、ウェールズが2度目の隷属をするのを予感しながら死んだのである。(『ウェールズ旅行記』、第1巻、394頁)

ここからは、ペナントの「我らが族長」グリーン・ドゥールに対する熱い思いが伝わってくる。『オワイン・グリーン・ドゥールの叛乱』の著者R・R・デイヴィスはペナントの功績を次のように述べている。

とりわけペナントは心の温かい愛国者であった。そして彼はグリーン・ドゥールに対し共感をもって相対した。グリーン・ドゥールはもはや「悪名高き反逆者」でもなく、またシェイクスピアの想像力が生み出した、どちらかというといふ幾分滑稽な自惚れの高い人物でもない。彼はむしろ「屈することのない我らが族長」であった。真に国民的英雄としてのグリーン・ドゥールが生まれつつあるのである。¹²⁾

ペナントのこの「屈することのない我らが族長」というグリーン・ドゥール観が、今日主流のグリーン・ドゥール像の根幹を形成しているのである。

4

1777年、ペナントは再婚した。幸せな結婚生活は、旅への情熱を減少させたが、彼は新たな著作や、既に出版した本の改訂に励んだ。『チェスターからロンドンへの旅』(The Journey to Chester to London)が1782年に、1785年には『ロンドンの歴史』が出版された。1793年までには自分の死後に備えて、自叙伝を書いている。また1796年には郷土史『ウ

イトフォードとホーリーウェルの歴史』(Whiteford and Holywell)を出版した。

ペナントは北ウェールズの名士として、広い交際をもった。彼らの名の多くは『ウェールズ旅行記』の序文に感謝の念を込めて記載されている。ウェールズの著名なジェントリの名に並び、カムロドリオンの創立者リチャード・モリスやオックスフォード大学ボードリアン図書館長のジョン・ライス師の名も見える。

また彼は、ウェールズの有能な人々を庇護し、援助を与えた。その中には一八世紀のウェールズを代表する学者であるエヴァン・エヴァンズ(Evan Evans:1731-88)、吟唱詩人名イエイアン・バルズ(Ieuan Fardd)がいた。彼はオックスフォード大学マートン・コレッジに入学するが、学位を取得しないまま大学を去り、牧師補となった。1764年には英文学史上でも画期的な中世ウェールズの文学を紹介した『ウェールズ古詩選集』(Some Specimens of the Poetry of the Ancient Welsh Bards)を出版した。しかし飲酒が祟ったのであろうか、生涯牧師補から昇格しなかった。1774年、北ウェールズ旅行をしたジョンソン博士がグワイニオッグのミドルトン家で食事をとったときに、エヴァンズは救いようもなく強い酒に溺れているとの話題が出た。¹³⁾ そのような彼をウェールズの代表的ジェントリであるサー・ワトキン・ウィリアムズ・ウィン2世(Sir Watkin Williams Wynn: 1749-89)は1771年から1778年まで年金を与え、彼の図書室を自由に使う便宜を与えていた。しかし、1778年、サー・ワトキンの怒りを買って、年金が打ち切られてしまった。ペナントはそのような彼に財政的援助を与えた。温かい心の持ち主ペナントはこのような場にも健在であった。

ペナントは英国内外から多くの栄誉を与えられた。スエーデン、アメリカ、スコットランドから叙勲された。またペナントは1767年には英国学士院会員となり、1771年にはオックスフォード大学より博士号が授与された。ちなみにサミエル・ジョンソンには、4年後の1775年に博士号が贈られている。

多彩の人トマス・ペナントは広く世にウェールズを知らしめ、様々の著名人と交流をもち、才能ある者には援助を与え、数多くの栄誉も得、健康にも恵まれ多くの旅をしたが、67歳の頃から、その健

康もしいに衰え、1798年、72歳で世を去った。

テキスト

Gerald of Wales, *The Journey Through Wales/ The Description of Wales*, Lewis Thorpe (tr.) (Penguin Books, 1978) 文中では *The Journey Through Wales* は『ウェールズ紀行』、*The Description of Wales* は『ウェールズ素描』と記す。

Thomas Pennant, *A Tour in Wales* (White and Hughes: London. 1781-84, 2vols) 文中では『ウェールズ旅行記』と記す。

注

1. James Boswell, *Life of Johnson* (Oxford University Press, 1953), pp. 931-3.

2. *Ibid.*, p.933.

3. Dewi Jones, *The Botanists and Guides of Snowdonia* (Gwasg Carreg Gwalch, Llanrwst, 1996), p. 27.

4. Joseph Craddock, *Letters from Snowdon* (1770), p.74.

5. Edgar W. Parry, *Revd John Parker's Tour of Wales and its Churches* (Gwasg Carreg Gwalch, Llanrwst, 1998), p. 48.

6. *Ibid.*, p.48.

7. Gerald of Wales, tr. Lewis Thorpe, *The Journey Through Wales/ The Description of Wales*, (Penguin Books, 1978), pp. 251~2.

8. Richard Holmes, *Shelley the Pursuit* (Weodenfeld and Nicolson, 1974), p. 187.

9. James Boswell, *The Life of Johnson*, p.447.

10. Sir John Wynn, (ed.) J. Gwynfor Jones, *History of the Gwydir Family and Memoirs* (Gomer Press, 1990), p. 51.

11. E. Hobsbawm and T. Ranger, *The Invention of Tradition* (Cambridge University Press, 1983), p.81.

12. R. R. Davies, *The revolt of Owain Glyn Dwr* (Oxford University Press, 1995), p.330.

13. James Boswell, *The Life of Johnson*, p. 443.